



川の 内

窪

川市街地から県道19号で松葉川に向かう途中、七里を北へ折れ県道323号に入り2kmほど行った勝賀野地区の分岐を左へ。分岐から1km程度のところからが川ノ内である。奥には標高693mの大小権現山がそびえる。山の向こうは大野見である。

川ノ内は、大小権現山から流れ出る勝賀野川に沿って、南北に長細く伸びている地区で、産土神は須賀神社。現在の30世帯、81人が暮らしている。

戦国期、仁井田五人衆(窪川氏、志和氏、西原氏、西氏、東氏)がいた時代には、西氏一族である勝賀野氏が地区の多くを領有し、残りを西氏と東氏が領地を分け合っていたとされる。江戸時代に入ると、窪川山内氏の知行地となった。

地区に「安楽寺」という寺がある。現在は、住民によって建てられた小さなお堂と、数体の仏像を残すのみとなっているが、明治の初めの廃仏希釈の嵐が起ころるまでは、地区内外からの信仰を集める名刹として存在感を示し続けてきた。寺領もかなりの面積を有していたようである。また、歴代住職の墓も幾つか残っており、その墓標からも当時の寺の影響の大きさを感じることができる。

川ノ内にはたくさんさんの言



安楽寺にある樹齢300年といわれるあすなろの樹。周囲には、五輪塔の墓石やお地藏様。

い伝えが残っているのだが、この安楽寺にまつわるものも多い。その一つが、享保9年(1724年)の雨乞いのお話。その年の田植えが終わってからというものであったことか、いっこうに雨が降らず村人たちは困り果てていた。雨乞いの祈祷も効果はなく、田にはひび割れが生じ、稲は枯れ始めた。ついに安楽寺の和尚様が祈祷を始め、最後に山の奥にある滝つぼに鐘を投げ込んで雨を乞うた。すると、たちまち水神様の使いたう大男(牛鬼とも言われている)が現れ、和尚様に襲いかかろうとしたので、和尚様は安楽寺に向かって一目散に逃げ帰った。大男は逃げる途中にあった山の神様を祀る社あたりで山の神に押しとどめられ、滝つぼに帰って行った。和尚様は残念ながら、疲労困憊で息絶えてしまったのだが、その執念が実り、とうとう雨は降った。しかも三日三晩降り続き、稲は生気を取り戻したという。

さて、地区の西北方、北ノ川地区との境にある山の頂付近には、西氏の山城「川ノ内城」があったとされる。

町のうごき		人口				出生 死亡 転入 転出				適正值(mg/l)		10月9日	
		9月30日	前月比	男	女	男	女	男	女	男	女	測定範囲以下	
計		16,890	-28	計	計	計	計	計	計	計	計	0.223	
世帯数		8,453	1					(9月中の届出)				測定範囲以下	
窪川地域		11,944人		大正地域		2,379人	十和地域		2,567人				測定範囲以下
												0.05	
												測定範囲以下	
												調査: 大正(吾川)	
												資料: 四万十高校自然環境部	